The Japan Lung Cancer Society

P-245 40歳未満原発性肺癌症例の臨床的検討

天理よろづ相談所病院　胸部外科
○園部　誠、中川正嗣、池上直行
鈴村雄治、長澤みゆき、神頭　徹

【目的】若年者肺癌は一般的に予後不良とされる．当院で最近10年間に加療を行った40歳未満の原発性肺癌症例につき検討し、その臨床的特徴を考察する．
【対象】1988年1月～1997年12月に当院で加療を行った40歳未満の原発性肺癌18症例(男性8例、女性10例、年齢28～39歳、中央値33歳)．
【結果】発見動機は健診異常6例、自覚症状12例．癌家族歴を6例に、喫煙歴を9例に認めた．組織型は腺癌が14例と多く、扁平上皮癌2例、大細胞癌1例、粘表皮癌1例．臨床病期はⅠ期5例、ⅢB期3例、Ⅳ期10例と発見時13症例が進行癌であった．7例(臨床病期Ⅰ期5例、ⅢB期2例)に切除を行ったが治癒切除を行い得たのは3例(絶治2例、相治1例)で3例が絶対非治癒切除となった．非手術症例11例全例にCDDPを中心とする抗癌化学療法を行い、うち7例に放射線照射を併用したが、2例にPRを得たのみで、4例はNC、5例はPDであった．18例のMedian survival timeは7ヶ月と予後不良であった．
【結論】40歳未満原発性肺癌症例では女性の比率が高く、腺癌が優位を占めた．発見時、既に進行癌のことが多く治療成績の向上のためには早期発見が必要と考えられた．また臨床病期が早期であっても、手術時に進行癌と判明することも多く、縦隔鏡や胸腔鏡による観察の必要性が示唆された．

P-246 若年者肺腺癌のp53蛋白発現の意義

長崎大学第一外科[1]，佐世保市立総合病院外科[2]，
同　病理[3]
○近藤正道[1]，久松　貴[1]，岡　忠之[1]，田川　泰[1]，
綾部公懿[1]，南　寛行[2]，岩崎啓介[3]

（目的）若年者(40歳未満)肺腺癌における血管新生と増殖能へのp53蛋白発現の影響を検討した。
（対象と方法）1974～1994に当科と佐世保市立総合病院で切除された若年者肺腺癌20例の5μmパラフィン切片について、抗p53抗体、抗PCNA抗体、抗VEGF抗体、抗CD34抗体を用いてLSAB法で免疫染色を行い、60歳以上肺腺癌対象群81例と比較した。尚、前3者はlabeling index(L.I.)で評価し、p53はL.I.≧10を陽性とした。腫瘍内血管数は辺縁部を200倍5視野計測した平均値を用いた。
（結果）若年者群のp53陽性例は30%で対象群の55.6%より有意に低かったが、若年者p53陽性群のPCNA L.I.は56.9、VEGF L.I.は75.9、腫瘍内血管数は108.8と若年者p53陰性群の35.6、48.9、83.8より有意に高かった。（共に$p<0.05$）対象群のp53陽性群ではVEGF L.I.が有意に高かったが、PCNA L.I.と腫瘍内血管数には差はなく、かつ若年者p53陰性群とほぼ同値であった。若年者群ではVEGF L.I.及びPCNA L.I.と腫瘍内血管数は有意な正の相関関係にあったことから、若年者肺腺癌ではp53蛋白発現によるVEGFのup regulateに応じて活発な血管の反応が生じ、高い増殖能を得た症例が存在することが示唆された。

P-247 左肺下葉スリーブ切除を施行した若年者（18歳）粘表皮癌の１例

国立療養所沖縄病院外科
○大田守雄、下地秀雅、稲福　斉、佐久本昇、野村　謙、
本馬周淳、川畑　勉、国吉真行、石川清司、源河圭一郎

【はじめに】肺癌患者総数に占める40歳未満の若年者の割合は、一般的に2%前後とされており比較的稀である。今回、われわれは喀血を主訴に発見された18歳、女性の粘表皮癌の1例を経験したので文献的考察を加え報告する。
【症例】18歳、女性。主訴：喀血。現病歴：咽頭痛、発熱、乾性咳嗽が続き近医耳鼻科にて加療を受けた。乾性咳嗽が続き、喀血が出現。近医へ入院。精査にて左下葉無気肺および左下葉の気管支内腫瘍(腺癌疑)と診断。精査、手術目的にて当科へ入院。術前の気管支鏡検査で左下幹入口部の低悪性度の粘表皮癌と診断された。
【手術】全身麻酔下に右側臥位とし後側方切開、第5肋骨床開胸とし、第5肋間筋を断端被覆用として温存し使用した。左下葉スリーブ切除およびリンパ節郭清(R2a)施行。気管支縫合は3-0、4-0 MAXSON糸14本にて縫合した。
【術後病理診断】気管支腫瘍は気管支軟骨までの浸潤で低悪性度粘表皮癌、P-T1N0M0 stage Ⅰと診断された。
【術後経過】術後2日目に胸腔ドレーンを抜管。術後約10カ月が経過したが再発なく外来通院中である。
【結語】1.比較的稀な若年者粘表皮癌の1例について報告した。2.本症例に関しては術前に腺癌が疑われたため全摘も検討されたが、術前の全麻下のTBLBにて低悪性度粘表皮癌と判明し左下葉スリーブ切除術を施行した。

P-248 75歳以上の高齢者原発性肺癌手術例の検討

近畿大学医学部第１外科
○原　　聡，廣畑　健，大塚浩史，西　耕作，安富正幸

【目的】高齢者原発性肺癌の手術適応や周術期管理は若年者と異なる。そこで，肺切除を施行した75歳以上の高齢者について術後合併症，術後成績，適応の妥当性を検討した。【対象】1990年~1997年に肺癌に対し肺切除を施行した75歳以上の症例28例(14%)を対象とした。【結果】年齢は75~82歳(平均77.1歳)，男22例，女６例，PSは0~1。組織型はSq:Ad:La=14:12:2でSqの頻度が75歳未満に比し高かった。術式は楔状:区域:葉二葉=3:3:21:1，郭清はR0:R1:R2=7:10:11。術後病期はⅠ:ⅢA:Ⅳ=24:1:3，Ⅳ期は全て肺内転移であった。喫煙係数は400-2400，1000以上が15例であった。既往歴は高血圧7例，糖尿病６例，慢性閉塞性肺疾患４例，虚血性心疾患・他臓器癌各３例。有症状は12例で，咳嗽６例と最も多く，次いで肺炎，血痰２例，喀痰，呼吸困難１例であり，うち11例は肺門型Sqであった。VC1.8-3.5L，%VC 69-119%，FEV1.0 1.2-2.5L，FEV1.0%40-85%と，75歳未満に比し拘束性障害が高率であった。術後合併症は喀痰貯留５例，このうち肺炎併発が３例，その他肺梗塞，ARDS，脳梗塞各1例であった。術死は1例のみであったが，肺炎の2例，肺梗塞，脳梗塞，低血糖発作の各１例が術後135日以内に死亡した。呼吸器合併症を併発した5例の平均FEV1.0およびFEV1.0%は1.5L，57%とFEV1.0%が明らかに低値であった。【結語】FEV1.0%≦60%では喀痰排出困難による呼吸器合併症を併発するため手術適応の判断に慎重を要するが，その他の症例の成績は良好であり，術前の喀痰喀出の訓練により高齢者においても根治切除は可能である。

NII-Electronic Library Service